

Culture in Psychiatry



ボッカッチョの『デカメロン』

高橋 正雄 筑波大学名誉教授

1351年にボッカッチョ(1313～1375)が発表した『デカメロン』¹⁾は、ペストが流行するフィレンツェから郊外の別荘に逃れた男女10名が10日間面白い話をしあうという物語であるため、感染症文学としての側面もあるが、『デカメロン』の冒頭を飾る『著者序』とそれに続く『第一日まえがき』には、憂鬱症の性差やピア・カウンセラー的な態度など、精神医学的にも興味深い内容が含まれている。

1. 『著者序』

『デカメロン』の『著者序』は「嘆き苦しむ人に同情を寄せるのは人の人たる所以でございます」という一文で始まるように、この著者は「辛い目に遭い、他人から慰められたことのある人においては、他人をいつくしむの情は一層顕著であってしかるべき」と考えている。それは彼自身が「たいへん難儀して人に同情を求め、助けられ、その貴重な喜びを味わった一人」だったからで、かつて高貴な女性に恋をした著者は、「不必要なまでに何度も何度も悩み苦しんだ」ものの、そうした苦悩のときに、「友人が楽しい話を聞

かせてくれて、絶望に落ち込んでいた私を慰めてくれた」という。そしてそのおかげで、「心身ともによみがえり、私はそれで救われた」と語るのだから、この著者は、友人の楽しい話を聞くことで心身の苦悩から解放されたという体験をしていることになる。

それは、『アラビアンナイト』において、妃の不貞を知って抑鬱になったシャハリヤール王が、千一夜にわたってシャハラザードという娘の物語を聞くことで状態が改善したことを想起させる設定だが²⁾、自らそのような体験をした著者は、「慰藉を必要とする方々には私はお返しをする務めがある」「それを一番必要とされる方に率爾ながらお助けの手を差し伸べたい」と語るのだから、彼はいわば物語療法によるピア(仲間)・カウンセラー的な役割を果たそうとしていることがわかる。

またこの著者は、「その慰めは殿方よりもご婦人方に差し上げる方がずっと理にかなっている」とも語っている。それは、女性は男性に比べて「憂鬱症」に耐える力がないのに加えて、そもそも「メランコリアは恋煩いをする殿方には滅多に生じない」からである。

著者は、「憂鬱で気分が重いといった場合でも、殿方には症状を軽くし、ふさぎの虫をはらす術がいくらでもある」として、男性の落ち込んだ気持ちを引き立ててくれる方法に、「散歩する。鷹狩や鹿狩に興ずる。漁や釣をする。馬に乗って闊歩する。賭け事をする。商取引をする」などをあげているのである。

もちろん、すべての憂鬱症がここにあげられているような気晴らしで予防や治療ができるわけではないであろう。しかし、『著者序』には、物語を聞くことの精神療法的な効果や、悩みの経験者が同じような悩みを抱えた人の助けになるというピア・サポート的な発想、社会的な要因によってもたらされる憂鬱症の性差などが記されているわけで、これに加えて、『デカメロン』の最後を飾る『著者結び』にも「女性の皆さまのメランコリアを吹き飛ばす鬱散じとして書かれた」と記されていることを考えるならば、『デカメロン』には、憂鬱症に陥った女性に対する精神医学的な認識と共感のもとに成立した精神療法の書としての側面もあることがわかる。